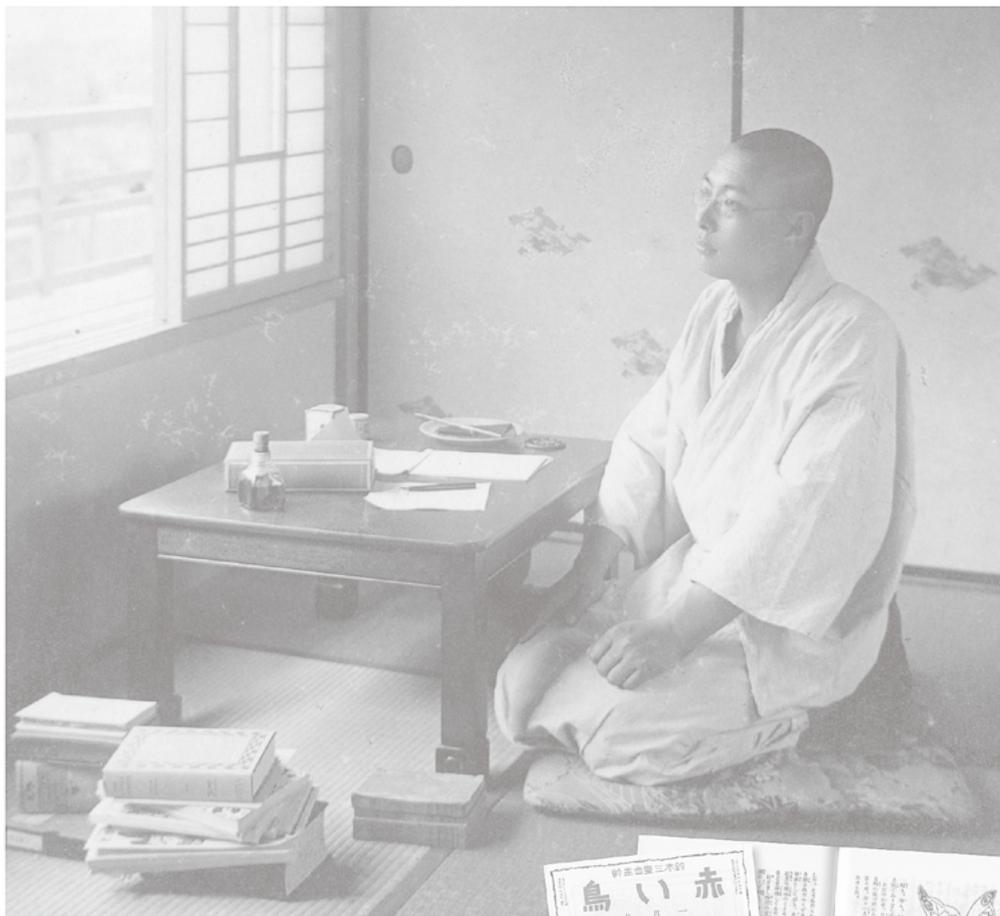


小川未明文学館 館報



特別展「小川未明と『赤い鳥』」を開催
児童雑誌『赤い鳥』創刊100年を記念して、
主宰者・鈴木三重吉と小川未明のつながりや
『赤い鳥』に発表された未明作品を紹介する
特別展を開催しました。

<写真>上段：小川未明（1917年（大正6）7月）

下段右：小川未明「月夜と眼鏡」(『赤い鳥』1922年（大正11）7月、挿絵 清水良雄)

下段左：『赤い鳥』（1920年（大正9）1月 表紙絵 清水良雄、未明童話「酔つばらひ星」掲載）



vol.13



小川未明文学館

新潟県上越市本城町8-30(高田図書館内)

TEL 025-523-1083

FAX 025-523-1086

小川未明文学館館報 第13号

2019年(令和元)5月31日発行(年刊)

目次

【寄稿】

後藤丹氏「岩内町での未明コンサート」 2

【報告】

文学館1年の記録(平成30年度)

・ 展覧会

・ 各種講座など

・ その他関連事業

・ 特別展

・ 特別展記念講演会

・ 文学館講座第1回

・ 文学館講座第2回

・ 文学館講座第3回

【小川未明文学賞】

【ボランティアネットワークだより】

「のぼら」 Vol.15

【文学館からのお知らせ】

20 18 17 15 13 11 9 8 7 6 4

岩内町での 未明コンサート

後藤 丹

(作曲家・上越教育大学名誉教授)



平成五年から数年間にわたり北海道の岩内町で小川未明をメインとした「夢の童話コンサート」という催しが開かれた。もう二十年以上前の話であるし、まして岩内以外ではこのことを知る方も少ないと思われるので、ここにあらましを記して置こうと思う。

当時、上越市と岩内町の間にはフェリーが就航したことがきっかけで姉妹都市関係が生まれ、双方の文化交流の機運が盛り上がった中での開催であった。コンサート実行委員会の中心となったのは、このころ岩内町の教育委員会におられた濱上俊治氏である。氏は文学と音楽に造詣が深く、未明の作品を音楽と一緒に朗読し、子供から大人までに聞かせようと思いつかれた。そして作曲家は上越在住の人間がふさわしいと考えられたのか、氏の知り合いであり上越教育大学で教育学担当の平山満義先生を通じて私に

話が来たのである。北海道好きの私は即座に承諾した。

題材は未明の「牛女」と「クラリネットを吹く男」で、クラリネット、ヴァイオリンとピアノという楽器編成がすでに決まっていたように思う。それまで朗読のための音楽を書いた経験がなかったけれど、「牛女」の不思議な雰囲気やなんとか音楽で表現しているうちにその要領を会得したような気がした。今思い返してもなかなか面白い雰囲気やたたえた音楽だと思ふ。一方「クラリネットを吹く男」は童話の中でクラリネットが鳴り響くので、どうしても説明的になってしまい、かえって作曲が難しく感じられた。

曲を完成させてリハーサルのために早春の北海道に渡った。岩内では役場の方や文化活動をしている若い人たちが盛大に歓迎してくれた。私は北海道には何度か足を運んでいたが、岩内は初めてで、そこがかつてニシン漁で大変な人口密度を誇ったこと、有島武郎との交友でも有名な画家の木田金次郎の住居が残っていて彼の美術館もあることなどを知った。リハーサルは演奏者の交通の便の関係もあり、場所を変えて札幌で行われた。ヴァイオリンが札幌交響楽団のコンサートマスターである深山尚久氏、クラリネットが偶然以前から知っていた同団の渡部大三郎氏、ピアノが札幌の大学に務めておられた大栗勝美氏という錚々たる三名のメンバーである。

本番は五月八日で、私は再び岩内の人となった。この時期桜が咲いているのは驚かされた。前半は通常のコンサートで、休憩を挟んで後半が音楽を伴った朗読である。

「牛女」は結構大掛かりで八曲からできている。地元の婦人たちが朗読を担当したほか、小・中学生

十八名がストーリーに合わせて版画を制作し、それを舞台のスクリーンに映し出しながら物語が進行した。なお、プログラムに小川清隆氏が「北国に生まれた者は幸せでございます。死があることよって、生を美しく感じるように、冬があるからこそ、春を嬉しく感じるのであります。(後略)」という印象深いメッセージを寄せられている。

この公演が成功したのか、翌年にも私の作曲で未明にちなんだコンサートが開催された。演目は「水車のした話」と「赤い蠟燭と人魚」で、そのほかに未明の詩「雲のごとく」と「海と太陽」を合唱曲に作曲して小学生に歌ってもらったりした。ところで「水車のした話」は雪国の情感を細やかに伝える童話であるが、調べてみたらそれらしき水車小屋が少し前まで私の勤める上教大のすぐ裏手に存在したことがわかった。また「赤い蠟燭と人魚」の舞台のモデルではないかと考えられる海を見下ろす神社や、現在大潟区の畑の中にひっそりとある古い人魚塚を、そのころ上越にいられた濱上氏や実行委員の方々と訪ねたりもした。

第2回コンサートプログラム表紙



◆文学館1年の記録◆

【展覧会】

平成30年度は、特別展を2回、企画展を2回（このうち館外開催が1回）、特集展示を4回開催しました。

特別展

＜第26回小川未明文学賞受賞記念展＞

〈会 期〉 3月31日～4月30日
 〈会 場〉 文学館市民ギャラリー1
 〈来場者数〉 2775人

第26回小川未明文学賞の応募作品476編の中から選ばれた、大賞・優秀賞の受賞者の声とその作品を紹介しました。また、学研プラス（東京）で開催された贈呈式の様子、これまでの大賞受賞者とその作品、今回の最終選考まで残った作品の講評、書籍化された第25回大賞受賞作品の校正原稿やイラスト原画（学研プラス提供）などを紹介しました。

来場者からは、「大賞作品を読んで感動した」、「面白い本がたくさんあった」という感想が寄せられました。

出張企画展

＜未明文学の森
—おいたちと作品—＞

〈会 期〉 6月16日～7月29日
 〈会 場〉 ミュゼ雪小町ギャラリー1
 〈来場者数〉 1050人

小川未明は、1961年（昭和36）に79歳で生涯を閉じるまで、小説家・童話作家・詩人・評論家として多様な作家活動を行いました。その作品は小説約600編、童話約1200編、随筆・評論・詩など約1400編と膨大なものです。この「未明文学の森」ともいえる膨大な作品や未明のおいたちについて、未明研究の第一人者である小笠裕二氏（上越教育大学副学長・小川未明文学館専門指導員）の解説により紹介しました。

来場者からは「解説がわかりやすく、興味深く鑑賞した」「未明文学の奥深さを知った」という感想が寄せられました。会期中の7月7日には、小笠氏を講師に未明童話「鉛チョコの天使」「白い門のある家」についてお話いただく公開講座を開催し、43人の方からご参加いただきました。

特別展

＜小川未明と『赤い鳥』＞

〈会 期〉 10月13日～12月9日
 〈会 場〉 文学館市民ギャラリー1
 〈来場者数〉 3190人

児童雑誌『赤い鳥』創刊100年を記念して、鈴木三重吉が未明に宛てた書簡や未明の蔵書などの関連資料150点を展示し、鈴木三重吉と小川未明のつながり、『赤い鳥』に発表された未明作品、『赤い鳥』から未明主宰の児童雑誌『お話の木』に至るまでの未明の創作活動を紹介しました。

来場者からは、「大正期の未明の創作活動がよくわかった」、「『赤い鳥』をはじめとする児童雑誌が一堂に紹介されていて良かった」という感想が寄せられました。

また、関連イベントとして10月14日には、未明ボランティアネットワークの協力による特別展おはなし会を開催し、23人の方からご参加いただきました。

さらに、『赤い鳥』に発表された未明童話の代表作「月夜と眼鏡」をイメージしたライトを作る子ども向けワークショップを開催し、24人の方からご参加いただきました。

（詳細は【報告】特別展8頁に掲載）



出張企画展〈未明文学の森〉公開講座



出張企画展〈未明文学の森〉



特別展〈第26回小川未明文学賞受賞記念展〉

■関連イベント 特別展記念講演会

「童心」の理想

— 小川未明・『赤い鳥』と大正の社会

河原和枝氏（甲南女子大学教授）

〈日にち〉 10月21日

〈会場〉 高田図書館会議室

〈参加者〉 25人

📖 中公新書『子ども観の近代―『赤い鳥』と「童心」の理想』（中央公論社 1998年）の著者・河原和枝氏を講師に、社会的な見地から『赤い鳥』と大正期の社会、『赤い鳥』に発表された未明童話の特徴についてお話いただきました。（詳細は【報告】特別展記念講演会9）10頁に掲載）

企画展

〈未明文学の森—おいたちと作品—アンコール展〉

〈会期〉 12月15日～1月14日、2月7日～2月24日

〈会場〉 文学館市民ギャラリー

〈来場者〉 1985人

📖 出張企画展〈未明文学の森—おいたちと作品—〉（会場…ミューゼ雪小町）が好評であったことから、当館を会場に小説集『悩ましき外景』（天佑社 1919年（大正8）8月）や童話集『ドラネコと鳥』（岡村書店 1936年（昭和11）12月）などの資料を加えて再展示を行いました。

特集展示1

〈教科書の中の小川未明

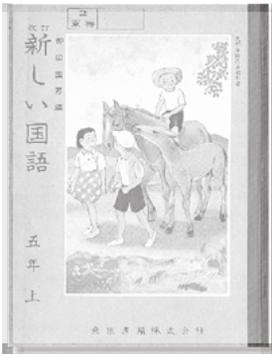
—もう一度読みたい、あの作品—

〈会期〉 3月24日～6月28日

〈会場〉 文学館常設展示場

📖 「春が、もう来るということを考えただけで、私たちの心は、喜びと希望にみつる。」これは、未明の随筆「春、都会、田園」（『童話雑感及小品』文化書房 1932年（昭和7）7月）の冒頭に述べられたことばです。春は「喜びと希望」に満ちた新しいスタートの季節です。学校では真新しい教科書が子ども達の手に届けられます。

未明童話の中からは「野薔薇」（『月夜と眼鏡』）「五月の川の中」（『殿様の茶わん』）などが国語の教科書に掲載されました。本展では、1949年（昭和24）以降の小中学校の国語の教科書の中から、未明作品などが掲載された12点を紹介しました。



「改訂 新しい国語 五年上」1952年掲載
東京書籍「殿様の茶わん」小川未明
小川英晴氏寄贈

特集展示2

〈学年別学習雑誌と小川未明〉

〈会期〉 6月30日～9月27日

〈会場〉 文学館常設展示場

📖 未明が幼児から小学生を対象とした学年別学習雑誌に童話を発表したのは、1934年（昭和9）から1957年（昭和32）にかけてのことで、その数は確認されているもので115作品に上ります。学年別学習雑誌に発表された未明童話は、子どもの生活や心のあり方を重視し、成長過程にあわせて書き分けられました。

未明は『未明カタカナ童話集』・『未明ひらかな童話集』（1936年（昭和11）文教書院）の序文に「低学年の子供達のために、彼等の生活の中心として考へるならば、それ等の児童達の特殊性について知らなければならぬ。私は、それ等を考慮して、この種の作品を書く場合には、いつも分り易い文学で、無邪気な美しい絵を描くといふような心持でめたのであります。」と述べています。

未明は対象年齢を意識して書くことに次第に手応えを感じるようになり、晩年に至るまで学年別学習雑誌に童話を発表しました。本展では、未明童話が掲載された幼児から小学6年生までの学年別学習雑誌24点を紹介しました。



特集展示2 〈学年別学習雑誌と小川未明〉



企画展 〈未明文学の森 アンコール展〉



特別展 〈小川未明と『赤い鳥』〉

特集展示3

〈新収蔵資料「死刑囚の写真」〉

〈会 期〉 9月29日～12月19日
 〈会 場〉 文学館常設展示場

〔新収蔵資料である未明自筆原稿「死刑囚の写真」は、『中央公論』1921年（大正10）2月に発表され、『雨を呼ぶ樹』など4冊の小説集に収録された重要な小説です。未明は1914年（大正3）と1918年（大正7）に長男・長女を貧しさのために亡くします。その苦しみに加え、虐げられた人々のために不平等な社会と戦うことを決意し、盛んに社会主義的な小説を発表していきます。その一方で、亡くなった子への鎮魂歌のような童話「金の輪」を1919年（大正8）1月に発表して以降、童話創作にも本格的に取り組みます。「死刑囚の写真」を発表した年には、小説24編、童話40編を創作。この中には「赤い蠟燭と人魚」「殿様の茶碗」「角笛吹く子」など、今でも読み継がれる名作があります。本展では、自筆原稿とともに、「死刑囚の写真」発表当時の未明を取り巻く状況、同時期に書かれた小説・童話などを紹介しました。

特集展示4

〈紹介展 未明童話と親しもう〉

〈会 期〉 12月22日～3月19日
 〈会 場〉 文学館常設展示場

〔当館では、幼児から小学生を対象に月替わりで未明童話1作品を冊子にして紹介する、こどもプログラム「未明童話と親しもう」を実施しています。本展では、平成30年度で紹介した「マアチャントトンボ」(『コードモノクニ』1933年(昭和8)5月)、「兄弟ノ野ネズミ」(『コードモノヒカリ』1937年(昭和12)1月)などの書籍・雑誌12点を展示し、素敵な挿絵とともに未明童話を読み返していただく機会としました。

〔各種講座など〕

朗読研修会

〈日 ち〉 6月8日・6月22日・7月6日の全3回
 〈会 場〉 高田図書館会議室
 〈参加者〉 26人

〔橘由貴氏(朗読療法士・ヴォイスアーティスト)を講師に、朗読研修会を開催しました。はじめに基本的な声の作り方や表現力の磨き方、発声練習方法の大切さを学びました。その後、未明童話「金魚売」(『赤い鳥』1927年(昭和2)6月)を題材に実践的な朗読を行い、講師から個々に指導を受けました。また、講師の朗読を聴き、受講者の今後の朗読練習の参考にしました。〕

童話創作講座

〈日 ち〉 6月16日・7月21日・7月28日の全3回
 〈会 場〉 高田図書館会議室
 〈参加者〉 13人

〔小川未明文学賞の最終選考委員である佐々木赫子氏(児童文学作家)を講師に、短編童話の書き方を学びました。まず、テーマや構成についてアドバイスを受けた後、受講者各自が創作した童話の講評をいただきました。さらに、受講者同士でお互いの作品について意見を交換し、今後の創作の参考にしました。受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーや市立図書館で読むことができます。〕

こどもプログラム 小川未明文学館こども祭

〈日 ち〉 8月26日
 〈会 場〉 文学館市民ギャラリー
 〈参加者〉 292人

〔未明童話や文学館にさらに親しんでもらうため、平成29年度から小川未明文学館こども祭を開催しています。2回目となる今回は、未明童話「月夜と眼鏡」をテーマとしたペーパーラフト、ぬり絵、かげ絵のほか、未明ボランティアネットワークの協力によるおはなし会を行い、幼児から小学生を中心に大勢の方にご参加いただきました。〕



童話創作講座



朗読研修会



特集展示3〈新収蔵資料「死刑囚の写真」〉

文学館講座

〈日にち〉 10月20日・11月17日・12月1日

〈会場〉 高田図書館会議室

〈参加者〉 延べ71人

特別展「小川未明と『赤い鳥』」の開催にあわせて、未明文学や児童雑誌『赤い鳥』について学ぶ講座を3回開催しました。

講師は、第1回 小笠裕二氏（上越教育大学副学長・小川未明文学館専門指導員）、第2回 柿本真代氏（仁愛大学人間生活学部子ども教育学科講師）、第3回 渋谷百合絵氏（秀明大学学校教師学部専任講師）でした。

〈詳細は【報告】文学館講座11〜16頁に掲載〉

文学館おはなし会

〈日 時〉 毎月第2・4日曜日 午後2時〜

〈会 場〉 文学館ヒックブックシアター

〈参加者〉 延べ269人

未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワークの協力により未明童話を中心としたおはなし会（朗読会）を23回開催しました。

出張おはなし会

未明童話に出会う機会をより多くの子ども達に提供するため、未明ボランティアネットワークの協力により、市内の小

学校や放課後児童クラブに朗読ボランティアが出向いて、おはなし会を開催しました。平成30年度は、市内小学校20校、放課後児童クラブ16か所、合計36か所（1315人）を訪問しました。

子どもプログラム 未明童話と親しもう

→子どもたちに届けたい未明のメッセージ

未明童話といえは「赤い蠟燭と人魚」、「月夜と眼鏡」などが有名ですが、このほかにも素晴らしい童話が数多くあります。これら子ども達に読んでもらうため、月替わりで未明童話1作品を冊子にして無償配布しました。配布作品は、幼児から小学校の低中学年向けの童話が中心となっています。参加者にはスタンパカードを配布し、スタンパ数に応じて、文学館オリジナルグッズをプレゼントしました。

【その他関連事業】

小川未明連絡会議合同イベント

〈未明童話の世界を感じよう〉

〈日にち〉 11月23日

〈会 場〉 上越文化会館

「未明フェスティバル2018」（上越文化会館主催）の開催にあわせて、小川未明連絡会議構成団体による合同イベントを行いました。

「出張小川未明文学館」として、未明紹介パネルの展示、未明フェスティバル来場者への「月夜と眼鏡」テキスト無償配布、絵本読書コーナーの開設を行いました。また、小川未明研究会（小笠裕二氏主宰）による未明オリジナルグッズの販売、高田文化協会による童話「月夜と眼鏡」にちなんだ小学生の図工作品の展示、未明ボランティアネットワークによるペーパークラフト講座、民間企業による未明オリジナルフードの販売を行いました。

第27回 小川未明文学賞贈呈式

〈日にち〉 3月30日

〈会 場〉 文学館市民ギャラリー

小川未明の文学精神を次世代に継承し、子ども達の心に夢と希望を育むことを目的に、1991年（平成3）に創設された小川未明文学賞の贈呈式を当館において開催しました。大賞は藤村沙希氏の「湊まぢの寅吉」、優秀賞は河村一美氏「昔、瞽女さんが雁木の町を歩いていたんだよ」に決定しました。

（大賞受賞者のコメントは【小川未明文学賞】17頁に掲載）



第27回小川未明文学賞贈呈式



小川未明文学館子ども祭（おはなし会）



小川未明文学館子ども祭（ペーパークラフト）

平成30年度特別展

小川未明と『赤い鳥』

〈会期〉10月13日～12月9日
 〈会場〉文学館市民ギャラリー

2018年(平成30)に創刊100年を迎えた児童雑誌『赤い鳥』と小川未明のつながりについて紹介する特別展を開催しました。

『赤い鳥』は広島市出身の小説家・児童文学者である鈴木三重吉が主宰した児童雑誌です。1918年(大正7)7月に創刊し、途中2年ほどの休刊をはさみながら1936年(昭和11)10月に終刊するまでの約16年間に196冊が刊行されました。芸術性豊かな童話・童謡の創造をめざし、芥川龍之介、有島武郎、北原白秋などの一流の作家・詩人が『赤い鳥』に携わり、日本の児童文学・児童音楽の創成に大きな影響を与えました。

小川未明が三重吉の運動に協力して『赤い鳥』に作品を発表するのは、1918年(大正7)8月号からです。1918年から翌年にかけて「紅い雲」、「赤い鳥」の詩2編を発表(1編は再掲)、童話は1920年(大正9)1月号に「酔つばらひ星」を発表して以後、1929年(昭和4)1月号の「赤いガ

ラスの宮殿」に至るまで約10年にわたり41編を発表しました。このなかには、「黒い人と赤い櫓」、「月夜と眼鏡」、「気まぐれの人形師」、「鉛チョコの天使」、「金魚売」など、名作として知られる未明童話が数多くあります。『赤い鳥』は、1936年(昭和11)6月の三重吉の死によって幕を閉じます。未明は同年10月に刊行された『鈴木三重吉追悼号』に『赤い鳥』最後の発表作となる「谷間の四十雀」を寄せています。

■未明と三重吉

小川未明と鈴木三重吉はともに1882年(明治15)生まれで、その足跡には類似性がみられます。

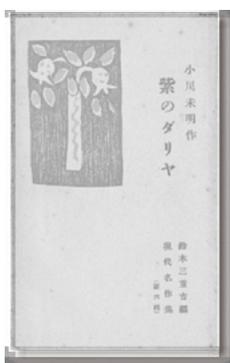
未明は坪内逍遙、三重吉は夏目漱石という優れた師と出会い、才能を見出されて小説家としての道を歩み、ネオロマンチズムの旗手として活躍します。ところが、三重吉は小説家としての行き詰まりを感じて1915年(大正4)に小説の筆を折ります。そして、1916年の長女すずの誕生を機に児童文学の道へと進みます。一方、未明は1914年(大正3)に長男哲文、1918年(大正7)に長女晴代を病気で亡くします。このころから空間や時間、生死に左右されない永遠の美の世界を童話の中に見出し、童話ひとすじに生きる決意を固めていきました。

三重吉は我が子の誕生、未明は我が子

の死を経験したことで、児童文学の道へと進みます。そして、三重吉は『赤い鳥』の主宰者として手腕を発揮し、未明は『赤い鳥』をはじめとする児童雑誌に創作童話を次々と発表し、童話作家としての地位を固めていきました。

■展示資料より

特別展で紹介した資料の中から二人のつながりを示すものをいくつか紹介します。



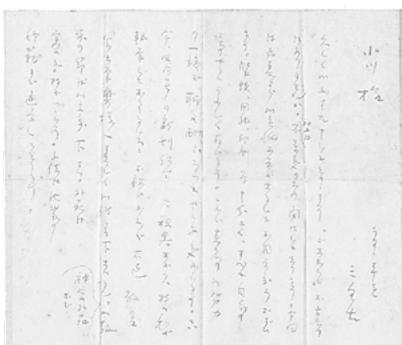
『紫のダリヤ』：青田田津所蔵(1915年) 寄託
 未明編(1915年) 寄託
 小川、鈴木、英氏寄託

1914年(大正3)に三重吉は自宅を出版社にして『現代名作集』20冊を刊行します。この第6編が『紫のダリヤ』1915年(大正4)です。未明の小説「紫のダリヤ」と「薔薇と巫女」が収録されており、三重吉は序文に「紫のダリヤ」を「未明氏の最近の作風を代表し得る佳作である」、「薔薇と巫女」を「独特のロマンティズムを代表すべき第一位の傑作」と述べています。



小川未明所蔵『小さな草と太陽』(1922年) 表紙絵：清水良雄、小川英晴氏寄託

当館では、三重吉が未明に宛てた書簡一通を小川家からお預かりしています。これには丸善版『未明童話集1』(1927年(昭和2)1月、装幀・武井武雄、挿画・初山滋)を見た三重吉の感想が述べられていきます。「御立派な本が出ました、御目出度うございます。装幀、用紙、印刷等申分なく、すべて自分のことのようにうれしく存じます。これで貴君の御努力の一端が聊か酬ひられたやうな気がします。」と書かれています。『赤い鳥』主宰者の三重吉から「装幀、用紙、印刷等申分」ないと言われたことは、未明にとつて最高の賛辞であったに違いありません。



小川健作(未明)宛鈴木三重吉書簡(1927年2月23日、小川英晴氏寄託)

特別展記念講演会

(講演要旨)

「童心」の理想

—小川未明・『赤い鳥』と大正の社会

講師・河原和枝氏(甲南女子大学教授)
期日・平成30年10月27日(土)
会場・高田図書館会議室



■「お伽噺」の時代

『赤い鳥』は、児童文学の歴史において非常に重要な意味をもっています。が、私は社会学の立場から、『赤い鳥』を中心とした大正期の童話・童謡運動が、たんに児童文学の中の出来事にとどまらず、当時の社会意識と深く関わり、今日まで続く「子ども観」を生み出す大きな役割を果たした、ということについて述べたいと思います。子どもの読み物は、作者は大人ですので、大人の子ども観、その時代の社会の子ども観を映す鏡と見ることもできます。明治、大正、戦後では、呼称が、お伽噺、童話、児童文学と変わっていくのですが、それも、その変化と関わっています。

まず、明治には、お伽噺の時代がありました。日本で最初の創作児童文学は、明治24年(1891)の巖谷小波の『こがね丸』であるといわれます。同作で成功した小波は、雑誌『少年世界』で創作お伽噺を書いたほか、日本と世界の昔話やさまざまな物語を「お伽噺」として次々と世に出して、子どもたちにたいへん愛されました。明治20年代の教育界では、空想を描くお伽噺は事実ではないからいけないという意見が多くありましたが、明治の終わり頃になると、子どもを楽しませながら教育するのに役立つと考えられるようになりました。つまり、お伽噺というツールを用いて大人が子どもを導く、という観点であり、それは当たり前のことのように思われます。しかし、次の童話の時代には、それとは異なる観点が登場してきます。

■『赤い鳥』の誕生

『赤い鳥』は大正7年(1918)、夏目漱石の弟子の鈴木三重吉により創刊されました。彼は従来のお伽噺や子ども向けの通俗小説、官製の唱歌を否定して、芸術的な童話・童謡を提唱しました。三重吉は、『赤い鳥』の標榜語で、当時、流行していた子どもの読み物の多くを「その俗悪な表紙が多面的に象徴している如く、いかにも下劣極まるものである」と非難し、「こんなものが子どもの真純を侵害しつつある」ということは、た

んに思考するだけでも怖ろしい」と述べて、「真純」「純麗」な子どもにふさわしい読み物が必要であると説きます。彼は子どもの読み物作家のなかで、小川未明だけは評価していますが、未明も三重吉と同様にロマン主義作家として知られており、子どもを「特別な存在」と見るロマン主義的な観点に立っていました。三重吉はお伽噺作家を排し、文壇のネットワークを活かして、第一流の大人の文学の作家や詩人を『赤い鳥』に動員します。

そのころ教育現場では、画一的な明治の教育を批判する大正自由教育運動がおり、これに関心がある教師が『赤い鳥』などの童話雑誌を教材として用いました。また、都市では近代的な新しい雰囲気を楽しむホワイトカラー層が誕生します。『赤い鳥』は表紙もハイカラで、このホワイトカラー層の好みに合致しています。一定の家庭での読者があり、学校でも使われたこと、文壇を動員し社会の関心をひいたことなどが、この運動を全国的なものにしました。『赤い鳥』の成功に導かれ、『金の船』『童話』などの雑誌が続々と創刊され、童話・童謡の黄金時代が到来します。

■『赤い鳥』の子どもたち

『赤い鳥』に描かれた子どもたちは、大きく分けて「良い子」「弱い子」「純粋な子」の三つの特徴があります。「良い子」は観念的な良い子です。現

実の社会はともかく、子どもは平等で仲良くあってほしいという、市民社会型のモラルを体現した良い子です。あるいは、有島武郎の「一房の葡萄」に描かれたような内省的な良い子。『赤い鳥』では行動的な子は少なく、内面で葛藤する子、反省する子が良い子として描かれます。気立ての良い子、優しい子、思いやりのある子もいます。これは、積極的で、自立して行動する良い子が描かれた『少年倶楽部』とは対照的です。

また、心や体の弱い子、孤児などの社会的な弱者としての「弱い子」も多く登場します。当時の作家たちは、弱さへの感受性がとても強かったようです。わざわざ弱さを描くのは、大正期に特徴的なセンチメンタリズムもありますが、弱さに意味があると考えられていたためです。とくに弱者を描き、その弱さを通してある種の理想主義を表現することに成功したのが、小川未明です。未明童話には、多くの弱い存在が描かれています。

たとえば代表作「赤い蠟燭と人魚」では最後に町が滅び、『赤い鳥』の「黒い人と赤い櫓」でも、村人たちの小舟が海に吞まれてしまうという結末を迎えます。売られた人魚や見殺しにされた人々、弱者の悲しみが、激しい復讐の正義となつて現れるのです。北国の海の暗く神秘的な情景の中で繰り返られる幻想は、未明童話の真骨頂といえるでしょう。未明は作家生活を続ける中で生活苦の辛酸

をなめ、長男と長女を亡くしています。彼は、虐げられた人々に深く同情しながらも、彼らが世の中を諦めて利己的で冷酷になる現実を見ていました。この二作品の中の人々は、固有名詞で描かれていません。誰もが被害者であり加害者ともなりうる、弱者の不幸は社会構造の問題であると、未明が考えていたためです。

未明は弱者を虐げる社会を変えたいと大正9年（1920）に日本社会主義同盟の発起人になり、社会主義に近づきました。ただ、ロマン主義的な資質から、社会変革の物語でなく神秘的・超越的な力による詩的正義の実現により、無辜の者の不幸が償われる物語を通し、自らの理想を表現しました。

「純粋な子」も多く登場します。たとえば未明は「月夜と眼鏡」で、じつに純粋で美しいファンタジックな世界を描いています。また「酔つばらひ星」のように、「良い子」「弱い子」「純粋な子」の三つの要素を併せ持つ子もいます。

このようにして、「善良さ」「弱さ」「純粋さ」をもつ、「無垢」なる子どもたちが『赤い鳥』から次々と生まれていきます。大正期の作家や詩人たちは、「無垢」な子どもを描くとともに、「無垢」な子どもを描くことにも、「無垢」な子どもを描くことを礼賛しました。ただ、読者である子どもがそれを気に入ったかどうかは別問題です。童心の大切さを語っていた童話雑誌は戦争が近づく大正末期の時流に合わず、売れなくな

り、それと反比例して、「偉大なる人」になることを少年の理想として掲げた『少年倶楽部』が大躍進をします。

■「童心」の時代——童心の礼賛

未明や北原白秋ら『赤い鳥』の作家や詩人は、「子どもこそ大人の理想である」「大人が童心を失うと墮落する」と考えました。この童心の価値をさらに広めたのが未明の高田中学の同窓生、相馬御風です。御風は大正7年に『大愚良寛』を出版し、人道主義的観点から良寛を「愛の人」と呼びました。が、童心がもてはやされ、世のブームになると良寛を「童心の人」と賛仰するようになりま

す。御風は良寛について多くの本を書き、まだ有名でなかった越後の僧、良寛を全国に知らしめました。このように大正期の童話・童謡運動では、子どもを「無垢」の存在と捉え、童心を大人の導きの糸と讃えたのです。そのため、戦後の児童文学からは、童話は現実の子どもが描かれていない、子ども不在の「童心主義文学」として批判されます。お伽噺から童話へと変わったように戦後は児童文学と名称も変わり、子ども目線でリアルな子どもを描くべきだという考えが強くなります。

■副次価値としての（無垢）

日本社会は明治維新以降、近代化、産業化が進み、明治末期から大正期にかけ

て消費生活も盛んになります。資本主義が進展する中で人々もその価値観を身につけて、合理主義や功利主義、人を押しつけてでも業績を挙げようとする業績主義などが重視されるようになります。そのような社会で善良さや弱さ、純粋さを大切に生きていくのは容易でないため、大人はその気持ちにいわば、蓋をします。しかし、それを失うことはできない。無垢の理想はどこかに置いておきたいので、当時の知識人たちは、子どもを無垢であると信じることでバランスを取り、救いを見いだそうとしたのではないかと考えられます。だからこそ、童心が礼賛され、非常に観念的な無垢な子どもが描かれたといえます。

社会学では、社会に必要な価値であっても社会の支配的な価値観（優勢価値）と対立するものを副次価値といえます。私たちの社会の優勢価値は合理主義や功利主義、業績主義ですが、副次価値も失くせないため、それは社会の一部分に限られた形で保存されます。つまり、無垢は副次価値として子どものイメージの中に保持されたといえます。大人は近代社会の価値体系の対極にある「無垢（童心）」の価値を子どもに割り当て、そこに救いや希望を見いだそうとしたといえるでしょう。

今日の高度な資本主義社会にある私たちにも、大正期の人々と同様に無垢の価値は必要です。ですから、しばし童心に

帰るために絵本がブームになったり、優れた未明童話が私たちを魅了するのだと思います。



特別展記念講演会 講師の河原氏



特別展記念講演会

文学館講座（講座要旨）

第1回

小川未明と鈴木三重吉

―『赤い鳥』の磁場と影響―

講師：小椋裕二氏（上越教育大学副学

長・小川未明文学館専門指導員）

期日：平成30年10月20日（土）

会場：高田図書館会議室



■はじめに

2018年（平成30）は『赤い鳥』創刊100年目となり、主宰の鈴木三重吉を再評価する機運が高まっています。小川未明は『赤い鳥』に詩2編・童話42編を発表しており、一九六冊刊行された誌面の約5分の1に作品が載っています。未明と『赤い鳥』の関係を示す資料や、三重吉と未明の交友関係、逸話はほとんどなく、不明なことが多いです。

■未明と三重吉

三重吉の長男珊吉が「未明と三重吉のこと」（『定本小川未明童話全集 第五

巻』月報 1977年（昭和52）7月）

で次のように書いています。「…父が死んだお通夜るとき、…未明が…亡父の霊前に対座したかと思うと入道のような坊主くりの巨体を突然ふるわせて大声でおんおんと号泣された。…亡父三重吉に対する心を同じくする者としての歎き悲しみを率直にぶっつけられたのではないだろうか」。二人は疎遠であったわけではなく、三重吉の活動を未明は理解しており、同じ子どものための文化・文学を作ろうとする思いがありました。

未明は三重吉の死去後に「童話への貢献者 鈴木三重吉氏を憶う」（『読売新聞』1936年（昭和11）6月30日）を寄稿し、三重吉を自身と同じ新ロマンチズムの旗手としています。美しい世界に憧れるのはロマンチズム、美しい世界を実現しようとするのが新ロマンチズムで、三重吉はその落ちつく先を童話に見出し、子どもの世界に入っていくたと述べています。二人は違う道を進むところもありますが、理解し合うところもありました。違うところは社会体制を変えていくのかどうかという点で、三重吉は変えずに社会を維持する、未明は資本主義社会を変えなければならないと考えました。

三重吉は未明と違って両親を早くに亡くしており、我が子の将来を思って『赤い鳥』を創ります。未明は1914年

（大正3）に長男哲文、1918年（大正7）に長女晴代を亡くします。二人の子どもが生まれた三重吉と、二人の子どもが亡くなった未明との大きな差。生まれた子に立派に育ってもらいたいという三重吉と、貧しくて子どもの治療もできず、悔しい思いを持ちながら社会を変えたいと考えた未明とは違います。三重吉は『赤い鳥』に社会主義的な色彩を入れません。二人は子どもの童心を大事にするという共通点がありながら、親しい関係ではなく、互いに並行して自分の世界を作っていました。

三重吉と未明は同じ1882年（明治15）生まれです。三重吉は悦二・ふさの三男として広島市に生まれ、未明は澄晴・千代の長男、一人っ子として上越市に生まれます。三重吉は東京帝国大学英文科で学び、夏目漱石の講義を受け、未明は早稲田大学英文科で学び、坪内逍遙の教えを受けます。三重吉は1906年（明治39）に「千鳥」を、未明は1904年（明治37）に「漂浪児」を発表し文壇に登場します。

三重吉は1915年（大正4）から『三重吉全集』を刊行しますが、小説家としての行き詰まりを感じて小説の筆を折ります。童話を書き始めるのは1916年（大正5）に娘が生まれたため、両親を亡くしていた三重吉にとって娘の誕生は大きな意味を持ちました。

未明は長男・長女を亡くして童話に専念するようになり、1926年（大正15）童話作家宣言をして小説の筆を折ります。子どもの世界に本領を見出した二人で

すが、三重吉は創作童話を作りませんでした。『赤い鳥』の経営者として、子どもの詩想・情操を高めるために文化・教育を変えていこうとしました。三重吉は作らせる側にまわり、未明は作る側にいきました。童話世界に自己の天分を見出し、縦横無尽に童話を書き上げることができた未明との違いは明らかです。三重吉は文章家・教育者で、『赤い鳥』という舞台で児童文化を開拓し、「日本児童文化の父」とよばれました。

■『赤い鳥』と未明童話

三重吉は1918年（大正7）に『赤い鳥』を創刊します。大正デモクラシーの機運も重なり、創刊後4年間は購読者も多く、経営は安定していました。『金の船』、『童話』などの『赤い鳥』類似雑誌の簇出（そうしゅつ）を見るほど、影響力は大きいものでした。

しかし、1923年（大正12）の関東大震災以後の社会不安を背景にした（文学の革命）の隆盛、昭和初年代へ続く不景気によって、これらの雑誌は廃刊に追い込まれ、『赤い鳥』も1929年（昭和4）に休刊を余儀なくされます。『赤い鳥』は1931年（昭和6）に復刊さ

れ、三重吉の死により1936年（昭和11）に終刊します。その年は日中戦争勃発の前年であり、『赤い鳥』の終刊は童話史における幸福な流れの終焉でもありました。

1918年（大正7）に創刊された『赤い鳥』に、未明は当初、童話を発表していません。長女の看病が主因と考えられます。同年12月に長女は亡くなりますが、その後は童話雑誌『おとぎの世界』の主宰を任せられます。そのため、『赤い鳥』創刊期には明治末に書いた詩1編を再掲し、1919年（大正8）2月に「赤い鳥」という詩を発表しただけです。

童話を発表するのは1920年（大正9）1月号の「酔つばらひ星」からで、以後、年に4編から6編の童話を掲載する常連作家となります。『赤い鳥』が休刊する1929年（昭和4）3月号までの約10年間で未明童話の黄金期で、この未明30代後半から40代後半までの間に未明童話の核が形成され、成長していきま

す。復刊された『赤い鳥』には、三重吉没後の特別号（1936年（昭和11）10月）に発表した「谷間の四十雀」以外、未明作品の掲載はありません。これは、社会主義的なものを拒否した三重吉の態度や、経営立て直しのために原稿料の高

第二次『赤い鳥』は会員制をとり、経費を切り詰めたが刊行が続けられました。『赤い鳥』の命運を定めた時代の動きは、未明にも同じ働きをします。大正期に歓迎された芸術性の高い童話雑誌が次々と廃刊に追いこまれるなか、未明は幼年童話や大人向けの童話を書き、童話のスペシャリストとなることで童話の冬の時代を生きました。

未明は童話のなかで社会主義について語った作家の一人です。この時期は小説も旺盛に書いており、そこで社会の現実を印象強く表し、社会矛盾を実際行動で改めようとする動きも少なからずありました。第二次『赤い鳥』では、新人作家の坪田譲治や新美南吉が登場し、三重吉はリアルな生活表現を子どもの綴り方に求め、理科読み物やノンフィクションを誌面に採り入れました。未明が昭和期に書いた「金魚売」「ガラス窓の河骨」なども、平明で生活に即した童話でした。

しかし、三重吉は生活基盤を覆す社会変革を望んでおらず、その枠組みを壊してでも子どもの世界を守ろうとする未明を理解できませんでした。未明の視線の先にあるのは弱いものとしての子どもで、子どもの人間性を守り、育むことを大事にします。三重吉の視線の先にあるのは純良な子ども、『赤い鳥』の読者層である中流家庭の子どもでした。

『赤い鳥』に童話を掲載した時期の未

明文学全体の仕事の振幅の大きさを考えたとき、『赤い鳥』掲載の未明童話の内容の振幅はそれほど大きくありません。誌紙により、未明の作風や傾向は変わります。童心主義を大事にした点で、未明童話は『赤い鳥』と基底において重なる部分がありますが、子どもを守るために社会改革を求めた未明は、『赤い鳥』の範疇からはみ出すところがありました。貧しさの中で二人の子どもを亡くした未明と、家庭をもつて二人の子どもを立派に育てることを夢見た三重吉の出発点は、やはり再度確認する必要があります。

■『赤い鳥』掲載の未明童話の特徴

未明童話の充実した10年間の特徴を考えることは、『赤い鳥』掲載の未明童話の特徴を考えることとイコールではありません。『赤い鳥』掲載の未明童話の特質は『赤い鳥』の主調音の影響下にあり、『赤い鳥』のコードに掣肘された枠組みの中で書かれました。『赤い鳥』は強力な磁場と影響力を持っていました。

『赤い鳥』の童心主義の磁場が未明童話を形作り、そこで掘り下げられた童話の主題が未明童話にしっかりと根をはらせたことは強調しておくべきことです。未明は多面的な活動をしており『赤い鳥』だけとはいえませんが、その磁場の中で育ち、未明文学の根底にあるものが育っていきました。



第1回文学館講座 講師の小笠氏



第1回文学館講座

近代日本の子ども雑誌

—『赤い鳥』にいたるまで—

講師・柿本真代氏（仁愛大学人間生活

学部子ども教育学科講師）

期日・平成30年11月17日（土）

会場・高田図書館会議室



■はじめに

小川未明は、子どものころに『日本外史』『論語』を学び、少年時代に読んだ雑誌として『中学世界』『新少年』『新天地』『史学会』などをあげています。未明の少年時代は、ちょうど日本で近代的な子ども向けの雑誌が次々と刊行された時期と重なります。本日は『赤い鳥』創刊に至るまでの子ども向け雑誌のあゆみについてお話しします。

■江戸後期の子どもと読書

江戸時代には、庶民の子どもは寺子屋、武士の子どもは藩校という身分に応じた学校制度が存在し、それぞれの子どもが、それぞれのやり方で勉強していました。

「日本資本主義の父」といわれる渋沢栄

一は、名字帯刀を許された豪農の家に生まれ、武家に近い教育を受けますが、子

ども時代に経験した漢籍の素読は決して楽しいものではなかったと回想しています。一方、初期社会主義者の片山潜は、庄屋の家に生まれ寺子屋に学び、『庭訓往来』『商売往来』などの往来物を読みますが、「いかに平易でも子供には字句の意味が分からないからちよつと覚えても直ぐ忘れてしまった」といいます。これらは子どもにとっての読書の喜びとはほど遠いもので、彼らが楽しんでいたのは、昔話の語りや絵草紙でした。

江戸期には本を読む習慣が庶民にも広まっており、学術書や宗教書などの不変の価値をもつ「書物」と、浮世絵や黄表紙などの娯楽性が強く消耗的に享受された「草紙」がありました。草紙は庶民のあいだで非常に流行し、絵草紙屋とよばれる本屋もできました。

『猿猴庵江戸循覧記』には、子どもが絵草紙屋で絵を食い入るように見ている様子が描かれています。当時の絵本『桃太郎宝蔵入』には、桃太郎が鬼を退治したあと鬼が島の遊郭へ遊びに行く様子も描かれており、大人と子どもの読み物の垣根はかなり低いものであったと考えられます。今の私たちが考える、「子どもに読ませたい／読ませたくない本」などが盛んに議論されるはじめるのは、明治期になってからのことです。

■明治新政府と教育・出版

人々の読書習慣が大きく変わる要因の

ひとつが、1874年（明治7）頃相次いで創刊された『読売新聞』『平仮名絵入新聞』などのいわゆる小新聞の流行といわれています。これらは平易な口語体で書かれており、ふりがなつきなので庶民にも受け入れられました。1877年（明治10）に西南戦争が起けると、戦況を知るために新聞が売れ、活字を毎日読む習慣が根づいていきます。

さらに、1872年（明治5）の学制発布により、読書・識字に変化が起りました。「必ず邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめんことを期す」との理念が示されますが、教育にかかる費用は受益者負担だったこともあり、1878年（明治11）の就学率は41%程度にとどまり、政府の理念と庶民の実態が離れていたことがうかがえます。

一方、初等教育制度が整備されはじめてきたことにより、子どもたちに教科書という新しい読み物が提供されていきます。明治前期には教科書として、中村正直の『西国立志編』、福沢諭吉の『学問のすゝめ』『世界国尽』など、明治期のベストセラーが使われていました。

また、キリスト教伝道のための子どもの向け読み物がたくさん出てきます。1876年（明治9）創刊のキリスト教児童雑誌『よろこばしきおとづれ』について、児童文学者でもあった沖野岩三郎は「当時の日本には、まだ児童の読み物といふものがなく、…児童を目的に児童

文学と意識して執筆した雑誌の世に現れたことは日本の文学史上に看過しえない大きな事件であった」と高く評価しています。

一方、『穎才新誌』（1877年創刊）など、生徒の作文や詩を掲載する投稿雑誌も出てきます。同誌は「明治文学の幼稚園」といわれ、尾崎紅葉、堺利彦らも投稿しています。熱心な投稿者であった田山花袋は『穎才新誌』に漢詩が載ったことを「天にでも昇ったように喜んで」と回想しており、また内田魯庵は「だ運動競技も唱歌もなかった当時の子どもたちにとっての唯一の晴れ舞台であり、小学校で良い点をもたらった作文は先生に頼み投稿してもらったといえます。作文投稿雑誌は流行しますが、子どもに大人が編んだ読み物を提供することを主眼とした雑誌はほとんどありませんでした。」

■読み物としての雑誌

今日に近い児童雑誌が創刊されるのは、1880年代後半になってからのことです。初代文部大臣・森有礼が初等教育の基盤を築いたこともあり、子どもの学習を意識した雑誌が登場してきます。

『ちねのあけぼの』（1886年創刊）は、関西のキリスト教関係者が編集した子ども向け雑誌です。先に紹介したキリスト教児童雑誌『よろこばしきおとづれ』はキリスト教に関する教訓話や聖書の話、宣教師の逸話などが中心でした

が『ちねのあけぼの』では、同じ話でもキリスト教に関する語句は削除し、一般的な教訓話に書き換えられており、伝道というよりも子どもの学習を目的にしていたことがわかります。

また、1888年（明治21）には『少年園』が山縣悌三郎により創刊されます。文部省で教科書編纂さんに携わった経験をもつ山縣は、日本には子どもの読み物が不足していることを「教育上の一大欠点」と考え『少年園』を創刊しました。

『少年園』は森鷗外や坪内逍遙らの寄稿もあり、「知識欲に燃えてゐる少年には恰好の課外教科書」として受け入れられていきます。『少年園』の人気を受けて『小国民』や『日本少年』、未明も読んだ『新天地』など数多くの児童雑誌が次々に創刊されました。

雑誌『少年園』の創刊後、人気を博した読み物のシリーズに、博文館の「少年文学叢書」があります。その第一巻が巖谷小波の『こがね丸』でした。当時の日本には児童文学という言葉がなかったため、小波は「少年文学」と名付けます。『こがね丸』は近代日本の創作児童文学の先駆けとなった作品として知られます。自分たちのための読み物に飢えていた子どもたちは『こがね丸』を大きな喜びをもってむかえ、「少年文学叢書」はヒットしました。博文館はさらに1894年（明治27）に雑誌『少年世界』を創刊、小波を主筆とし、小波はこの雑誌に子どもの冒険心や愛国心をくすぐるお伽噺を発表していきます。博文館は地方の

本屋とも契約を結ぶことで、『少年世界』を含む博文館の出版物を広く明治の日本社会に流通させました。

■『赤い鳥』へ

巖谷小波は、読者である子どもに寄り添おうとした作家と言われますが、同時に時代や子どもたちの置かれている現状に迎合してしまったという側面も指摘されています。営利企業である博文館は売れるものを作りたいという思惑があり、小波の執筆態度と博文館の利益追求が結びついた結果として、「薦ほりよ、りよ」にみられるように軍国主義的・国家主義的な側面を無批判に作品の中に混ぜ込んでしまいました。

しかし、明治期の終わりになると、小波のお伽噺とは違う新しい子ども像を提案しようとする作品が出てきます。それが、小川未明の『おとぎばなし集 赤い船』（1910年）です。これは近代的な童話の先駆といわれ、浪漫主義の理念が導入されており、教育の一助としての位置づけに止まっていた子どもの読み物の可能性を広げるものとして評価されます。『赤い船』以降、たくさんの童話が生み出されていきました。

子どものための童話と童謡の雑誌である『赤い鳥』は2018年（平成30）で創刊100周年を迎えましたが、『赤い鳥』をめぐる岡本太郎のエピソードから子どもの本を大人が選ぶ難しさがうかがえます。岡本太郎は、母に小学校で流っている講談本を読みたいといっています

が、歌人・小説家であった母岡本かの子は芸術的にすばらしいものを子どもに与えたいと考え、『赤い鳥』を買いに行きます。しかし、『赤い鳥』は本屋に置いておらず、代わりに本屋ですすめられたのは、小波のものであったためかの子は落胆したというのです。子どもが読みたい本と親が読ませたい本のギャップが読み取れる回想です。

19世紀になると、印刷メディアの充実、子どもの就学率・識字率の向上によって、子どもたちは小波の『こがね丸』や雑誌『少年世界』に惹きつけられます。その後、小川未明の『赤い船』や雑誌『赤い鳥』などの子どものための読み物が刊行され一見子どもの読書の世界は豊かになったかにみえます。ところが「児童書の発展が子ども世界の充実に奉仕するのではなく、子ども専用のゲッターの拡大に繋がり、子どもに対する呪縛性を強めるという皮肉な状況」になったと本田和子は指摘しています。

岡本かの子のように子どもに良いものを読ませたい、低俗なもの、猥雑なものを読ませたくない、という意識が働くあまり、子どもだけのものを読んでおきなさいと隔離するような現象がおこり、結果的に「子ども専用のゲッター」が拡大されることにつながったということです。

『赤い鳥』から100年。子ども自身が読みたいものと、大人が子どもに読ませたいもののギャップは、児童文学には現在もついてまわる大きな問題のひとつであると考えておられます。



第3回

『赤い鳥』と未明童話

講師：渋谷百合絵氏（秀明大学学校教

師学部専任講師）

期日：平成30年12月1日（土）

会場：高田図書館会議室



■『赤い鳥』の童話

『赤い鳥』は鈴木三重吉が1918年（大正7）に創刊した童話雑誌で、小川未明も約40編の童話を発表しました。三重吉が『赤い鳥』で目指したことは、「『赤い鳥』の標榜語」にもあるように、それまでの児童文学を批判して違うものを生み出すことでした。三重吉は夏目漱石の弟子で、文壇でも顔が広がったことから、『赤い鳥』にはそうそうたる文壇人を参加させることができました。

『赤い鳥』以前の子どもの読み物で力を持っていたのは、巖谷小波のお伽噺です。小波は昔話に着想を得て、『日本昔噺』『世界お伽噺』を刊行しました。初期の『赤い鳥』は東西の昔話の翻訳・翻案がメインで、小波の活躍の上に『赤い鳥』が成立したといえます。『赤い鳥』では、昔話に描かれる不思議で美しい出

来事やモチーフが童心を養うと考えられていました。

小波のお伽噺は江戸期の草双紙の影響を受け、庶民の生活で昔話のパロディを描いています。物語のユニークさが魅力で、子どもの心理には焦点が当たっていません。一方、『赤い鳥』の童話は、東西の昔話の翻訳・翻案を中心とし、子どもを純真無垢な存在と見なし、その心を描こうとしたことに特徴があります。

まず、昔話の翻訳・翻案として、三重吉の「またぼあ」をみてみます。時代性・地域性を排除した言葉を使い、「○が××しました。」という誰でも再現できる文体で書いています。『赤い鳥』は子どもの作文の模範となることも目標で、子どもが書ける文体の確立を目指しました。三重吉はこの文体で昔話を翻訳・翻案し、『赤い鳥』の他の作家にも同じ文体を求めました。この文体は、近代の口語文体で昔話や物語を語る時の見本となります。

また、『赤い鳥』には、菊池寛「納豆合戦」や有島武郎「一房の葡萄」のように子どもの純真で善良な心や、繊細な心の動きを描く童話が多くみられます。小川未明も純粋で美しい子どもの心を描きたいと考えており、『赤い鳥』と同様の子どもイメージ・童話観を持っていたと考えられます。しかし、未明童話には暗く不気味に見える童話も多いです。

■初期の未明童話

未明は『赤い鳥』創刊以前から童話創作に着手していました。「赤い船」は『おとぎばなし集 赤い船』（1910年（明治43）、京文堂）の表題作ですが、

主人公・露子のオルガンへの憧れが、途中からオルガンがやってきた外国への憧れに変化していきます。未明は、子どもはここにはない美しい世界に本当の心の故郷があると感ずる、と考えていたのでしょう。次に「森」（『女子文壇』1910年（明治43）5月）は、家族の視点で子どものことを書くことで、小太郎が不思議な少年に惹きつけられていく気持ち

を大人が理解できない感覚も同時に描いています。最後に唐突な死が訪れますが、よく読むとお話の途中から家族と小太郎が別世界にあるような書き方になっています。

この二作品の文体を見ると、「赤い船」の文末では未明特有の「のであります。」という表現が使われ、「森」は小説の文体になっていますが、『赤い鳥』の文体を先取りしていることが分かります。未明は『赤い鳥』に近い文体を確立しますが、その効果がよく表れているのが「金の輪」です。

「金の輪」（『読売新聞』1919年（大正8）2月21日～23日）には、全く同じ光景が繰り返し描かれます。現実には全く同じ光景が繰り返されることはな

いので、現実にはない美しさが生まれま

す。童話は反復表現が使いやすい、音としても反復することで詩的なイメージが生まれます。

■『赤い鳥』時代の未明童話①

——貧しく孤独な子どもを描く童話——
未明童話は、子どもの憧れを描くだけではなく、憧れを抱かざるを得ない子どもの環境や冷たい社会のあり方も描いていきます。

「罌粟の圃」（『赤い鳥』1920年（大正9）7月）では、父と物乞いをして放浪する子どもを周囲の人は助けようとしません。小太郎もそれを社会のあり方の問題として認識できず、また片目の小太郎に向けられた差別的な視線も理解できず、ついには父に置き去りにされてしまいます。その心細さ・絶望感が、母親と罌粟の圃で再会するという奇跡を起こします。大正期の罌粟には芸術的・幻想的な美を生み出すイメージがあるので、未明は罌粟の圃で母子を再会させることで非現実世界を作り上げたかったのだと思います。

また、「港に着いた黒んぼ」(『童話』1921年(大正10)6月)には、大人たちが放浪する子どもに手を差し伸べようとしないうかが描かれています。弟はそれを認識することができません。弟は目が見えないので大人の姿が見られず、言葉を交わす場面も出てきません。

「罌粟の圃」「港についた黒んぼ」には、主人公に共通点があります。一つは、家のない物乞いの子ども。もう一つは、目が悪くて庇護者に頼るしかなく、自分を取り巻く大人や社会を認識できない存在。未明は、物乞いの子・放浪する子を繰り返し描きますが、子ども自身の感情・心情はあまり描いていません。むしろ、周囲の大人たちの姿を強調して描くことで、子どもが漠然と感じる社会の怖さ・冷たさを表現しようとしています。

■『赤い鳥』時代の未明童話②

――昔話的な童話

次に、主人公の子どもをないがしろにしたために村や町に災いが起こる昔話的な未明童話を紹介します。

「黒い旗物語」(『日本少年』1915年(大正4)4月)は、子どもに冷たい周囲の大人が描かれ、町が火事で滅びるという物語です。子どもの祟りとは書かれていませんが、吹雪の中を追い出された子どもが感じた孤独・悲しみが情念として残り続けています。「黒い人と赤い

鶴」(『赤い鳥』1922年(大正11)1月)は、死者たちの無言の悲しみを人々が恨みのように感じ、死者への罪悪感を抱きながら出来事を語り継いでいる様子が描かれています。いずれも、社会の冷酷さとこれに対する失望・無念の思いを昔話風の物語展開で表現しています。

■『赤い蠟燭と人魚』について

「赤い蠟燭と人魚」(『東京朝日新聞』1921年(大正10)2月16日〜20日)は、昔話の類型と結びつきが深いお話です。若狭には、ある漁師が人魚を釣り上げて殺してしまつたところ、津波が来て町が滅んだというお話が残っています。

また昔話の「童宮童子」では、水の神から授かった子の体は異様で醜く、大切にしている間は富をもたらしませんが、ないがしろになると家から去り災いが起こります。つまり、「赤い蠟燭と人魚」は、人魚と神の授かり子の部分を合体させて成立しているとともに、不思議なものに悪いことをしたら罰があたるといふ伝承を人中の人々も共有しています。老夫婦も町の人々も噂や伝承に流されるばかりで、誰も人魚の気持ちや辛さと向き合おうとしていません。

この作品は、人魚の怨霊譚と神の授け子が幸・厄をもたらすといふ昔話を合体して作られています。また、作中の人々も、こうした伝承や民間信仰を信じてお

り、結末の町の滅びには噂や伝承に流される人々への批判が込められています。

■まとめ

『赤い鳥』では、不思議で美しい昔話の世界や純粋で善良な子どもの心を描く作品が多くあります。この雑誌は都市部の中産階級の子どもの読まれることを前提に書かれています。中産階級の家庭は子どもを大事にし、教育にもお金をかけます。親・教師・周囲の大人との関係も良心的で温かい関係が基本です。

これに対して、未明は『赤い鳥』を読むこともできない、社会に見捨てられた最底辺の子どもの目に向けていました。貧しく孤独な子どもは、自分を取り巻く人々の冷たさや怖さを漠然と感じますが、社会のシステムは理解できません。未明は、子どもたちが社会に対して抱く恐れと無言の怒りを、昔話の類型をアレンジして表現しました。同時に、社会の中で忘れられ見捨てられた子どもに対して、大人たちも感じている罪悪感や恐れを、伝承という形を使って表現しようとしています。未明の童話は、最も弱い立場の子どもたちに寄り添う童話でした。未明童話の問題意識は、決してこの時代だけのものではない、現代にも読み継がれる価値を持っていると考えます。



第3回文学館講座 講師の渋谷氏



第3回文学館講座

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、1991年（平成3）に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。

平成30年度で第27回目を迎え、これまでに延べ13000編を超える作品が国内外から寄せられました。

大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。



受賞のひまわり

この度は、小川未明文学賞の大賞を頂き、感激しております。全国の書き手たちが目指す、大変名誉ある賞です。二十七回目ということで、元号が改正される歴史の変わり目に、優秀賞の河村さんと相まって、新潟県内で初めての受賞ということに、驚きも喜びもひとしおです。

小川未明の童話は、示唆に富んだ深いものを有しているとともに、大変美しくもあります。子どもにとってはもちろんのこと、おとなにとっても素晴らしい文学作品であります。

そうした優れた童話を残した業績はもちろんのこと、童話というジャンルを確立し後世のために尽力してくれたことが、その後優れた児童文学を生む土壌となってくれました。

ですので、私も受賞を機に、未明童話をふたたびひもとき、その神髄を味わうとともに、それを子どもたちに読んであげること、未明童話を引き継いでいきたいと思います。また、書き手として良い作品を書けるよう精進し、いつの日か、後に続く書き手たちに、私が学んだものを手渡せればと思っております。

小川未明文学館主催の童話創作講座も、毎年素晴らしい講座です。私もその恩恵を受けましたが、他の受講生の方々も活躍を始めており、全国区で注目されるべき取り組みかと思えます。

そうしたこともふまえ、小川未明文学賞の継続・発展は、関係するみなさまのご尽力によるものです。そのようなみなさまにこころより感謝申し上げます。



第27回小川未明文学賞大賞受賞

藤村 沙希さん

（大賞作品「湊まちの寅吉」）

第28回募集要項

◆募集作品

- ①短編部門（小学校低学年向け）
 - ：400字詰め原稿用紙20枚～30枚
 - ②長編部門（小学校中学年以上向け）
 - ：400字詰め原稿用紙60枚～120枚
- いずれも小学生を読者対象とした創作児童文学で未発表の作品。各部門同時応募も可。パソコン等の場合はA4サイズで縦書き400字詰め換算枚数を明記。

- ・表紙に題名、筆名、本名（ふりがな明記）、年齢、職業、性別、〒住所、電話番号を明記。
- ・原稿用紙2枚程度のあらすじを表紙の下に綴じる。

◆応募資格

不問（ただし、当文学賞の過去の受賞者は除く）

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参

◆締切

2019年10月31日（木）（当日消印有効）

◆入選作

- ・大賞（賞金100万円・記念品）
- ・優秀賞（賞金20万円）

◆発表

2020年3月上旬（予定）

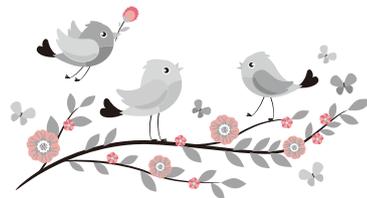
*詳細は小川未明文学館ホームページをご覧ください。いただくか、左記にお問い合わせください。

応募・お問い合わせ先

〒943-0832 新潟県上越市本町3-3-12
 上越市文化振興課
 「小川未明文学賞係」
 TEL 025-526-6903
 FAX 025-526-6904
 E-mail: mimei@city.joetsu.lg.jp

文学館でのおはなし会

(毎月第2、4日曜に実施)



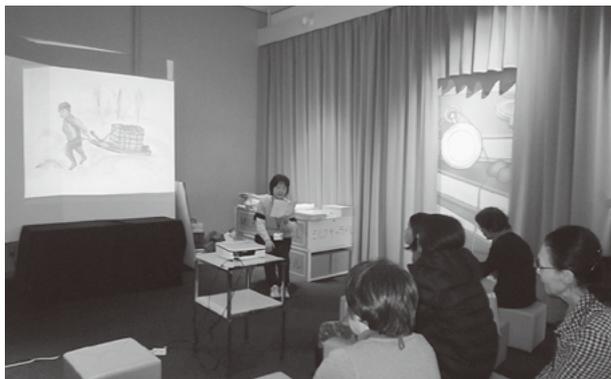
お話の会うさぎ

「牛女」・・・大きいので、牛女と呼ばれていた女の人が、病気になる亡くなりました。その後も子供の行く末を心配し、見守る母の情愛の深さを描いたお話です。



グループさくら

未明の作品「雪と2羽のからす」「やまなし」「谷間の四十雀」の3作品。パネルで紹介しているシーンです。大人も子供達も静かに聞いてくれました。



グループ空

「雪とみかん」の作品を映像といっしょに楽しみました。大人の方も来てくださるようになりました。



特別展おはなし会

10月14日

作品名	担当グループ
1. 「子ざると母ざる」	グループ空
2. 「しいの実」	未明童話の会
3. 「谷間の四十雀」	グループさくら
4. 「王様の感心された話」	シャーフの会
5. 「飴チョコの天使」	お話の会うさぎ



未明童話の会「しいの実」

送られてきた「しいの実」を義雄さんが学校へ持っていき友達と分けて食べる楽しい様子。お礼に青いかわいいうさぎを田舎へ送る。昭和初期の楽しいお話です。



シャーフの会「王様の感心された話」

この世の始めに神様から姿を変えるように言われた3人の天使が、それぞれ星・花・小鳥になりました。そして、人々のためだと思うそのやさしい心がけに王さまは感心されたのです。

出張おはなし会、会員加入の連絡先

上越市文化振興課

〒943-0832 上越市本町3-3-2

TEL 025-5226-6990

FAX 025-5226-6904

E-mail: mimei@city.joetsu.lg.jp

のばら

vol.15

発行：未明ボランティアネットワーク
発行日：2019年5月31日

未明ボランティアネットワークだより

平成30年度
の活動

- ・小川未明文学館ビックブックシアターおはなし会…全23回、延べ参加者269人
- ・出張おはなし会（小学校、放課後児童クラブ等）・・・36か所、1,315人
- ・特別展おはなし会（小川未明文学館 未明の部屋 参加者23人）
- ・会員の研修会（長岡市撰田屋地区・新潟県立歴史博物館）

本年度を振り返って

児童雑誌「赤い鳥」創刊100年を記念し、特別展おはなし会を行いました。未明は「赤い鳥」に創作童話42篇を発表しましたが、そのうち2篇を含め5作品を発表しました。

また、研修会で訪ねた長岡地域の「町おこし」に、未明作品が見直され注目された事に感動。会員がみんな意欲的に作品に取り組む姿勢を感じています。[会長]

出張おはなし会



グループさくら（宝田小学校）

シックな木造の校舎で「こまどりと酒」「ひょうひょうてりうそ」「山之上の木と雲のはなし」の活動をしました。未明について、よく理解している児童もいました。



グループ空（東本町小学校）

9月3日（月）5年生のみなさんです。「千羽鶴」の作品を、映像と篠笛の演奏でたのしました。



研修会

長岡市撰田屋地区・歴史博物館

6月19日、未明の「砂漠の町とサフラン酒」のヒントになったとも言われているサフラン酒本舗を見学しました。大正時代の豪商が残した鏝絵（こてえ）蔵は見事な建築で圧倒されました。



● お知らせ ●

小川未明関係資料の収集について ご協力をお願い

小川未明文学館では、未明に関係する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いいたします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問い合わせいただくと幸いです。

【主な収集資料】

1. 特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

2. 図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所蔵した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3. 参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

訂正 『小川未明文学館 館報』第12号
P 3 上段 7 行目 ×…詩だ。
○…童謡だ。

令和元年度 小川未明文学館カレンダー

- 4月 特別展「第27回小川未明文学賞受賞記念展」
会期：4月2日(火)～4月24日(水)
- 5月 小川未明文学館子ども祭
5月11日(土)
- 6～7月 朗読研修会
6月7日(金)・6月28日(金)・7月5日(金)
童話創作講座
6月15日(土)・7月20日(土)・7月27日(土)
- 10月 特別展「未明と子どもたち」
会期：10月12日(土)～12月1日(日)
- 第28回小川未明文学賞募集締切
10月31日(木)
- 10～12月 文学館講座（全3回）
10月19日(土)、11月16日(土)、11月30日(土)
- 3月 第28回小川未明文学賞贈呈式（東京）
※開催日未定

*通年で所蔵品を紹介する特集展示を行っています

未明ボランティアネットワークによるおはなし会
*毎月第2・4日曜日午後2時から文学館にて実施
*学校等での出張おはなし会を随時実施

問合せ
〒943-1083
新潟県上越市本町8-30（高田図書館内）
TEL 025-523-1083
FAX 025-523-1086
URL [https://www.city.joetsu.niigata.jp/
site/mimeihungakukan/](https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/mimeihungakukan/)



小川未明文学館 利用案内

開館時間
火・金曜日 午前10時から午後7時
土・日・祝日 午前10時から午後8時まで
(6・9月は午後8時まで)

休館日
毎週月曜日（祝日の場合はその翌日）・
祝日の翌日・館内整理日（毎月第3木曜）・
資料整理期間・年末年始（12/29～1/3）

入館料 無料

発行 上越市文化振興課

〒943-0832 新潟県上越市本町3-3-2（高田まちかど交流館）

TEL. 025-526-6903 / FAX. 025-526-6904 / E-mail. mimei@city.joetsu.lg.jp